

長野県林業総合センター
Nagano-prefectural Forestry Research Center

塩尻市片丘 5739

TEL 0263-52-0600

FAX 0263-51-1311

マツの葉枯性病害と防除

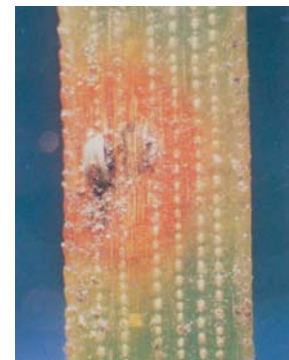
キーワード：マツ、葉枯性病害、褐変

マツは庭木の代表的な樹種であるとともに、病気や害虫が多い樹種として知られており、中でも小枝単位で黄変や褐変する被害が多くみられます。

マツによくみられる葉枯性病害

1. 赤斑葉枯病

症状：9月頃から当年生針葉に小褐点が生じ、やがて暗赤褐色の病斑となる。翌春に病斑の中央部に黒点が生じ、この黒点が表皮を破って露出して暗緑色の「すすかび状物」(孢子塊)に覆われる。2年生の病葉は、病斑部から褐変し枯れる。



赤斑葉枯病の病斑

2. すず葉枯病

症状：6～7月頃に新梢の針葉の葉先から黄～褐変が進み、針葉の先端から中ほどにかけて灰褐色となり枯死する。健全部と枯死部の境界は明瞭で、枯死部はやや萎縮したようになる。枯死部の表面には黒色すす状の小粒点が多数形成される。



すす葉枯病の病葉

3. 葉ふるい病

症状：7～9月頃から当年生針葉に小褐点が生じ、秋から冬にかけては病状は進行しない。翌春に針葉が灰褐～灰白色に枯死して落葉する。落葉した病葉には黒色の横縞が入り、その間に楕円形ないし、紡錘形の菌体が形成される。



葉ふるい病の病葉

なお菌体が成熟したものには縦に亀裂が入る。

なお、赤斑葉枯病と初期の病徴が似ているが、葉ふるい病は病葉に黒色の横縞が入るので区別ができる。

4. 葉さび病

症状：4～5月に針葉に長さ0.5～4mm、幅1～2mmの黄橙～橙赤色のふくろ状隆起物（さび孢子のう）が散生または、鎖生する。やがてふくろ状隆起物の表皮が破れ、さび孢子が飛散し、針葉はしだいに生気を失って灰白色となり枯れる。



葉さび病の病葉

葉枯性病害の防除方法

病害防除の第一は、病気が発生してからの手当てではなく、病害の発生を未然に回避、予防することです。そのため、葉枯性病害では、病落葉を集めて焼却したり、土中に埋めてマツの周辺を清潔な環境にすることが大切です。

なお、ミニ技術情報No.13で紹介したような誤った剪定を行うと樹勢を衰弱させ病気が発生しやすくなるので注意してください。

また、葉ふるい病が発生している場合は、薬剤による防除では被害部の治療効果はほとんどありませんが、健全な部位への感染は防止できますので、病原体の感染初期、および伝染時期に銅水和剤（キノンドー水和剤40、ドウグリソ水和剤）を散布することが有効です。

担当者 育林部 岡田充弘